

オノマトペ認定の差異とその基準

—宮澤賢治「なめとこ山の熊」を題材に—

おの まさひろ (明治大学)

ただ こうこ (フェリス女学院大学・岩手大学 [非常勤講師])

かわさき めぐみ (名古屋学院大学)

1. 目的・方法・資料

オノマトペの認定は、だれが行なっても、全く同じものになるのか、ならないとすると、どこにどのような差異が生れるのか、そして、それは、どのような理由に拠るのかという問題意識に基づいて、3名のオノマトペ研究者が、同一の資料におけるオノマトペ認定を持ち寄り、比較して、上述の問題に答えることを目的とする。

方法は、次の通りである。オノマトペ研究を専門のひとつとしている研究者3名が、それぞれ、オノマトペと認定するものを、同一の資料から抜きだし、その結果を比較する。認定結果に基づいて、異同を整理して、どのようなものが、どのような理由から、オノマトペとして認定されたり、されなかったりするのかを、整理・考察する。

対象とする資料としては、

宮澤賢治「なめとこ山の熊」

(『【新】校本 宮澤賢治全集 第十巻 童話Ⅲ』1995、筑摩書房)を選んだ。その理由は、同資料が、短編童話として、長さも程よく、独自のオノマトペや方言に基づくオノマトペが使用されている可能性があることから、オノマトペ認定上の興味深い差異をもたらすサンプルとして好適であることが期待されたからである。なお、引用も同書による。

2. 認定の基準

以下、3名の認定基準を、問題となる語にコメントするかたちで、各自述べていくこととする。この際、それぞれを、基準A、基準B、基準C、と呼ぶ。認定Aが、最も広い基準で、基準Bが、それに次ぎ、基準Cは、最も狭い基準である。それぞれの基準は、各研究者の判断によるものであるが、実験的に認定した側面を持つことを、予め諒解願いたい。(ここまです、文責、小野・竹田・川崎)

2.1 基準A

基準Aは、①形式と②意味用法でオノマトペを認定する比較的シンプルな認定基準で、異論もあると思われるが由来についてはいったん不問とする立場である。時代的・地理的な変異を扱う際には、いったん既知・既存の枠を取り払って広くとらえる視点が必要になると考

えたことから作業仮説的に設定した。そのため、この基準で広く収集した後、吟味する過程でオノマトペから外れていく語もあると考える。

以下、語基部分をアルファベットで示したり、用例を上げたりしながら示す。（「」の用例は宮沢賢治「なめとこ山の熊」による）

①形式（一部、語構成を含む）（リ：イ・ラも含む）

1～4 拍の語基の反復（ABAB、AAAA など）：チラチラ、チラチラチラ、チラチラチラチラ、ガガガガ、など

A（一）ン／{リ／イ／ラ}／ッ：ガン／ガーン、ガリ、ガッ、など

AB（一）ン／{リ／イ／ラ}／ッ：ガタン／ガターン、ガタリ、ガタッ、など

上記の反復（A ン A ン、AB ン AB ンなど）：ガンガン、ガタンガタン、など

AxBx B（x：一／ッ／ン／リ）：ノッシノッシ、など

A ッ B リ（A ッ B イ）：スッカリ、カッキリ、ガッチリ、サッパリ、ドッカリ、ビックリ、モッタリ、ヤッパリ、ユックリ、など

A ン B リ（A ン B イ）：ションボリ、シンミリ、ノンビリ、ボンヤリ、グンナリ（方言：ドンガリ、ズンバイ…）、など

ほか。

後接要素：助詞ト／助詞ニ／無助詞のほか、述語 {スル／シタ／シテ（イル）}／ダなどが後続する場合：用例は②と重複

※派生・転成とみられるもの

名詞：ケラケラ笑（わらい）、心（チム）ドンドン（沖縄方言）、ベコ、ワンワン、など

動詞（接尾辞メク／メカスや動詞ツクなどが後接）：ウメク、ガタメク、キリキリメク、トチメカス、ウトルク、カサツク、など

形容詞（接尾辞シー／タイなどが後接）：ケバケバシー、

②意味用法

a. 「～の音／声／様子を表す」という意味を表し、後接要素に助詞ト／ニまたは無助詞で、その後に続く述語を修飾する用法。

例：「山のなかごろに大きな洞穴ががらんとあいてゐる。」（助詞ト＋動詞テイル）

「ボートはきつと助かったでせう、」（助詞＋動詞）

「のっしのっしとやって行く。」「ちょっと顔いろを変へた。」「そのお蔭でやっとおもひだしました。」（新校本 10p. 189）（助詞ト＋動詞）

「犬もへとへとにつかれ」（助詞ニ＋動詞）

（作例）カラカラに乾いた。（助詞ニ＋動詞）

「主人はゆっくりいろいろ談す。」（無助詞＋動詞）

「主人がどっかり座ってゐた。」（無助詞＋動詞テイタ）

b. 主にスル／シテ／シテイル／ダなどが後接して、そのような状態であることを表す。後接形式とセットで一つの述語になる用法。

「光が網になってゆらゆらする。」(台川・新校本 p. 31)、「小十郎がびっくりしてうしろを見たら」「ぴんぴんして生きてゐたのだ。」(スル／シテ／シタ)

「まっ青なつるつるした空を」「のろのろした気味の悪いところを」「みんなはざわざわしました。」(新校本 10p. 189) (シタ (+名詞))

「うれしくてわくわくしてゐる。」(シテイル／シテイタ)

「まだぐらぐらだ。」(台川・新校本 10p. 29) (ダ)

c. 助詞ノを後接して後続する名詞を修飾する用法。

「ちよつとの間に木の芽が大きくなった。」(新校本 10p. 246) (文責、竹田)

2.2 基準B

1 拍または2 拍の語基を持ち、反復やオノマトペ標識付加によるオノマトペの形をしているもので、動きや状態のありさま(擬態語)、音や声の写し(擬音語)を表す副詞、または「する」などによって動詞化したものをオノマトペとみなしている。

日本語のオノマトペの認定から除外したものは、次のものである。

①漢語由来のもの

「そこから淵沢川がいきなり三百尺ぐらゐの滝になってひのきやいたやのしげみの中をごうと落ちて来る」(264 頁)

「ごうと」は「轟と」という漢語由来のものと考えられる。角岡賢一(2007:32)の指摘において「擬似オノマトペ」とされる。日本語の本来的な語感に基づくものではないとされる。

また、「だんだん」についても、「段々」が語源として考えられるため、擬似オノマトペに属するものである。角岡(2007)の言う「かな擬似オノマトペ」と考えられ、ひらがな表記が多いため、日本人として語源をあまり意識せずに使っている。

②境界線のもの

「やっと」「ずうと」「すっかり」「ちよつと」「ちゃんと」「うんとこさ」

もとはオノマトペかもしれないが、オノマトペの表す様態の具体性が薄れており、さまざまな動詞とともに用いられるようになったものとするものである。オノマトペの特徴として、そのイメージ性がある。意味として概念化されていないものだが、これらは通常のオノマトペに比べてイメージが薄れている。しかし、使い方によっては具体的な様態を表すこともあり、境界線にあると考えられる。

これらに対して、除外の可能性はあるものの、認定したものは次のものである。

①語源は一般語であるものの認定

「淡い六日の月光の中を向ふの谷をしげしげ見つめてゐるのにあった。」(266 頁)

「すると母親の熊はまだしげしげ見つめてゐたがやっ

と云った。」(266 頁)
「しげしげ」は「見つめる」を修飾する様態副詞である。「繁々」などと表記でき、一般語の由来であり、かつては「見る」や「眺める」以外も修飾していたが、現在では「見る」

「眺める」以外に使われることはほとんどない。意味が限定されることで、かえって具体的な様態を表すようになったように感じられるため、オノマトペとして認定されがちとなっている。

② 声の写し

鍵括弧に入っていない声を表す表現が、オノマトペと似た形で出てくる。このうち、小十郎（人間）が「う う」となる声については、基準 A・C ではオノマトペと認定していない。

「そしてその広い赤黒いせなかが木の枝の間から落ちた日光にちらっと光ったとき小十郎は う うとうなって谷をわたって帰りはじめた。」

これはオノマトペではなく感動詞とされる。これに対して、「ごうごう咆えて」「があつと叫んで」という熊の声を写したものは、基準 A・C もオノマトペとしている。人の声ならば感動詞、熊の声ならばオノマトペと分けることが可能である。しかし、「なめとこ山の熊」には出てこないが、人の声であっても泣き声を描写した「えーんえーん」などはオノマトペとして扱われることがある。感動詞なのかオノマトペなのかは、判断の難しい問題である。

③ 方言の語との類似性からの認定

「熊は棒のやうな両手をびっこにあげてまっすぐに走って来た。」(271 頁)

「びっこ (跛)」は通常一般語とされる。ジャパンナレッジ版の『日本国語大辞典』によると、『大言海』にて「足を引く意か」、『名言通』で「ヒキコ (引子)」の義」とある。しかし、これをオノマトペの可能性があるととしてオノマトペに認定したのは、方言に類似の語がオノマトペに似た使われ方をしているからである。

「ピコピコ」「ピコタコ」「ピコラピコラ」「ピコタンピコタン」など、類似した語基「ピコ」を持つオノマトペに似た形が東北方言に存在する（山形県）。「ピコラピコラ」はオノマトペに特有の AB ラ AB ラ型を持っており、東北地方に比較的多く見られるオノマトペの型と一致する。濁音の「ピコ」のほうは「ビッコラシャッコラ」（山形）、「ビクタラビクタラ」（青森・岩手・秋田）などの語が多数見られる。「*ビコビコ」という語基「ビコ」は見当たらないものの、オノマトペ的な語形の派生が見られるため、オノマトペの可能性ということで今回挙げた。（文責、川崎）

2.3 基準 C

歴史的な状況も加味したかたちで、オノマトペを認定することを試みた。また、同じ語形であれば、すべてオノマトペとは考えず、用法を加味して認定した。認定としては、最も狭いものになる（ことを目指した）。

(1) **だんだん** 「だんだん」は、もと、「段々」であって、〈段のかたちにつながったもの〉を意味する。これが、かりに、〈次第に〉という意味に変化したとしても、それは、普通語の意味変化であって、そのことによって、オノマトペ化したとはいいきれない（ただし、「どんどん」などとの群化は考慮すべきか）。

(2) **ちょっと** 『日本国語大辞典』第二版によれば、「ちよっ」とは「副詞「ちっと」の変

化したもの」とされる。この説明の根拠自体、若干疑わしくはあるが、そこから、同辞書で、「ちと」を閲すると「「ちと（些）」の変化した語」とある。そうすると、「ちと」の「ち」が問題になるが、「ちひさし」の「ち」などとの関連も考えられる。「ちと」→「ちっと」→「ちょっと」という変化であれば、オノマトペとは認定しがたい。ただし、基本要素に{ちょ}を設定し、促音付加→「ちょっ」、撥音付加→「ちょん」（の間）、×2／促音付加→「ちょちょっ」などを関連付ける可能性もあるか。なお、深津周太（2016）では、「中世以降、‘量程度の小ささ’を表す口語表現は、「ちっと、そっと、ちょっと…」といった擬態語由来の～ト型副詞によって担われてきたと言える。」と、「ちょっと」は擬態語であるという立場を採っている。

(3) やっと 「日国第二版」では、「「ようよう」と同語源か」とある。「やうと」→「やっと」のような変化はありうるのか疑問。応答や驚き、気合いを込める「やっ」は、感動詞。

(4) う う 小十郎のうめき声「う う」は、人間のうめき声であって、他の発音をしているものを、「う」の音ですくい取って表現したものではないと判断した。それに対して、熊の「ごうごう」や「があっ」は、非分節的な熊の咆え声を、人間の分節音に写したものであるから、オノマトペと考えられる。

(5) ずうっと 「ずうっと」は、

「小十郎は犬を連れて白沢をずうっとのぼった。」(266 頁)

「まはりをずうっと高い雪のみねがによきによきつつたてゐた。」(271 頁)

のように用いられている。「ずうっ」は「「ずっ」の長音挿入形。「ずっ」は、本来は、〈ものがずれたり、こすれ合うときの低い音〉を表わし、〈ためらわないで推し進める様子〉〈ある状態が長く続く様子〉と意味変化していくが、上記の例は、〈ある状態が長く続く様子〉の意味の情態副詞化した例であり、〈重摩擦推移感〉とでも言うべきオノマトペ性は希薄になっていると判断した(ただし、「ずうっとのぼった」のほうは、〈重摩擦推移感〉がありそうでもあり、迷うような例である)。「山の斜面をずうっと滑り落ちた」のような例であれば、オノマトペとしてもよいように思われる。

(6) ちゃんと 「ちゃんと」には、

「小十郎はちゃんとかしこまってそこへ腰掛けて」(268 頁)

のような例がある。この「ちゃんと」は、情態副詞としての〈予定していたとおり確実に〉という読みだけでは理解できないように思われる。「ちゃんと」には、東北方言などで〈落ちついて、きちんと〉のような意味で用いられることがあるので、あるいは、方言オノマトペの可能性もある。他にも、「まるで顔も知らないおかしい赤い髪の子供がひとり一番前の机にちゃんと座ってゐたのです。」(「風野又三郎」『新校本全集九』6 頁) のような例がある。

一方、「ちゃんと」には、

「二年目にはおれもおまへの家の前でちゃんと死んでゐてやるから。」(270 頁)

のような例もあり、これは、情態副詞としての〈予定していたとおり確実に〉で、理解でき

る。

(7) しげしげ 「しげ - る」「しげ - し」の語根で、一般語と考えられる。でなければ、{しげ} 自体が、オノマトペの基本要素ということになる。が、「しげっ」「しげん」「しげり」等の加工した形がない。また、「日国第二版」によれば、「しけしけ」「しけじけ」とも。」とあり、語形も揺れている。ここから、語根「しけ」を切り出せるのであれば、「重く」〈かさなる〉などとの関連も考えられるか。(文責、小野)

3. 結論—全体的なまとめ—

今回の3人のオノマトペ研究者は、それぞれ、オノマトペの方言間の差異(基準A)、民話のオノマトペ(基準B)、オノマトペの史的变化(基準C)を主たる研究分野とするものであるが、全体的な一致率は高いものの、それぞれの視点から、オノマトペとして認定するものに、一定の差異が生じた。すなわち、

延べ A 83 語認定 B 74 語認定 C 65 語認定

異なり A 69 語認定 B 58 語認定 C 56 語認定

のようになる。この差が生じた理由は、Aが、オノマトペの可能性のあるものを、もっとも包括的に認定することを試みたのに対して、Bが、一般的な情態・程度副詞と思われるもの(「ちょっと」「やっ」と「もっと」等)や、語源から「だんだん」を認定せず、さらに加えて、Cが、意味的、歴史的にみて、普通語であると考えたもの(「ずうっと」「しげしげ」等)をも認定しなかったことによる(語としては認めても、用法としては認めない語もある)。なお、三者の認定の差異を典型的に表わす表を下に付す。

	冴え冴え	だんだん	ちょっと	やっ	もっと	しげしげ	ずうっと	がさがさ
A	×	○	○	○	○	○	○	○
B	×	×	×	×	×	○	○	○
C	×	×	×	×	×	×	×	○

(文責、小野・竹田・川崎)

[参考文献]

角岡賢一(2007)『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版

鈴木雅子(2007)「解説：歴史的変遷とその広がり」『日本語オノマトペ辞典』pp. 577-648

深津周太(2016)「「ちょっと」類連体表現の歴史 ―二つの型による機能分担の形成過程―」『日本語の研究』12-4